

## H. ジェイムズ『四度の出会い』 — 初期の習作 —

堤 千佳子

### I

H. ジェイムズの作家活動は大きく三つの時期に区分することが可能である。『国際テーマ』を扱い『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*)で頂点を迎えた初期、劇作に情熱をかけた中期、そして劇作に失敗した後再び『国際テーマ』を取り上げ、長編3作を完成させた円熟期 (the major phase) とも呼ばれる後期である。

ジェイムズの『国際テーマ』とは『アメリカの無垢 (American innocence)』と『ヨーロッパの経験 (European experience)』との対比を通して、主人公の自我の確立、意識の成熟を描写したものである。ただし、ここで述べるヨーロッパの経験を体現するのはヨーロッパ人に限らず、長年ヨーロッパで暮らしてきたために、アメリカ人としてのアイデンティティを喪失し、すっかりヨーロッパ化してしまった (Europeanized) アメリカ人を含むものである。

同じ『国際テーマ』を扱ったものでも、初期の作品と後期の作品とではその扱われ方が大きく異なる。初期の作品ではアメリカとヨーロッパの対比に重点が置かれ、登場人物の心理面での分析はまだそれほど深くは行われていない。ところが後期の作品ではアメリカとヨーロッパの対比は手段に過ぎず、ジェイムズの関心は登場人物の意識に寄せられている。『意識の作家』と呼ばれるジェイムズの作品は『意識のドラマ』へと変化するのである。

ジェイムズの『国際テーマ』を扱った作品の主人公には『アメリカ娘』

(American Girl) が登場するものが多い。ジェイムズは自分自身認めているように、実業的な、いわゆる男性的な社会にはあまりなじみがなかった。それは彼の場合、職業作家とはいえ、生活するのに困らない資産を相続していたため、実業に携わる必要がなかったからである。更に言えば、彼の父、ヘンリー・ジェイムズ・Sr. においても同様であった。結果として一種の有閑階級に属していたと言えよう。また、彼は当時は女性の方が社会生活において最も顕著で独特の地位を占めていたと確信している。<sup>1)</sup> ジェイムズはこの『アメリカ娘』にアメリカの無垢を体現したのである。注意すべきなのは、この無垢は主人公の『意識の程度に応じて』様々なタイプを示すのである。向こう見ずで攻撃的なものから、自己閉鎖的で頑ななもの、そして最終的にはすべてを（自分に対する罨を仕掛けたものまでも含め）許し、包み込むような包括的なものへと発展して行くのである。この『アメリカ娘』には若くして亡くなったジェイムズの従妹ミニー・テンプレルの肖像が色濃く反映している。彼女のイメージは『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*) において最も鮮明であるが、彼女の資質はそれぞれの作品の主人公の中に様々に分けて描かれている。例えば、その生き生きとした『炎のような精神』は『ある婦人の肖像』のイザベル・アーチャーの中に、生への強い意志と寛容さは『鳩の翼』のミリー・シールの中にといった具合である。

本稿で取り上げる『4度の出会い』('Four Meetings') は初期の代表作の一つであり、ジェイムズの名を一躍有名にした『デイジー・ミラー』('Daisy Miller') の発表される1年前に書かれた短編である。あまり取り上げられることの多い作品ではないが、『国際テーマ』の扱い方や、主人公の『アメリカ娘』としての一類型、語り手である『私』の意識に注目すべき点が見られる。

## II

この作品は3章からなり、あたかも3幕劇を提示しているかのようであ

---

る。一人称の語り手である『私』(最後まで名前は伏せたまま)が主人公キャロライン・スペンサーの死を知って、彼女との4度の出会いを回想するという設定である。二人の出会いは17年前にさかのぼるが、その間、わずかに4度出会っただけで、それ以外には何の接触も持たなかったと推測される。従って、『私』がこの主人公キャロライン・スペンサーにこれほど関心を持ち、その出会いを回想して見せるという設定には多少無理が有るように感じられるかもしれないが、無垢なアメリカ娘の良心が、墮落したヨーロッパ(ヨーロッパ化した彼女の従兄とその妻)の犠牲になるという悲劇性に心ひかれたからに違いない。この『私』はヨーロッパに長く滞在しているアメリカ人とされている。一人称と三人称の違いはあるにせよ、次の作品、『デージー・ミラー』の登場人物であり、作品の視点がおかれるウィンターボーンとの類似点を見逃すことはできない。

第1章では二人の初めての出会いが語られる。雪深いニュー・イングランドのいなか、ノース・ヴェロナの友人宅でのパーティーの席であった。どのようにして婦人たちがやって来たのか訝るほどの激しい雪であった。ニュー・ヨークからやって来た『私』とその友人という二人の紳士がいるという魅力のためだろうと『私』は推測する。地理的にも気候的にも閉鎖されている状況で、集まった婦人たちはおそらく社交的な催しに飢えていたのだろう。

友人の母親の紹介で『私』はキャロライン・スペンサーと知り合う。彼女は男性とふざけること(flirting)が好きではないと述べられる。これは『デージー・ミラー』においてウィンターボーンがデージーを『かわいい遊び好きなアメリカ娘(a pretty American flirt)』と評したことから分かるように、アメリカにおいては若い未婚の娘の男性との交際についてはヨーロッパにおいてほどうるさくなく、かなり自由だという認識が一般に流布していたからだと思われる。この後もキャロラインについては全く『遊び好きな娘(flirt)』的などは皆無である。

彼女の外見についてはどうであろう。

Miss Caroline Spencer was not quite a beauty, but was none the less, in her small odd way, formed to please. Close upon thirty, by every presumption, she was made almost like a little girl and had the complexion of a child. She had also the prettiest head.... She was "artistic," I suspected, so far as the polar influences of North Verona could allow for such yearnings or could minister to them....<sup>2)</sup>

この描写から彼女が素晴らしい美人ではないが、魅力的だということが理解できる。主人公がそれほどの美しさを持っていないというのは『デージー・ミラー』以外のほぼすべてのジェイムズの作品に共通している。彼の作品ではヒロインはそれほど美しくはないが、人と違ったところ、それは意志の強さであったり、知性であったり、寛容さであったり、精神的自由さ (moral spontaneity) であったりするものを持ち、周囲の人を魅了する。そしてその美しさはそれを認識できる者にしか通じない。このことはキャロラインにしても同様である。

キャロラインは『私』の見せるヨーロッパの写真にすっかり心を奪われる。そしてスイスのシヨン城の遠景の写真を見るや、そこを舞台としたバイロンの詩を『自信のほども鮮やかに正確に口ずさむ』のである。彼女は歴史も旅行案内も雑誌もたくさん読み、知識としてのヨーロッパはすっかり知り尽くしているが、実際のヨーロッパ経験はない。観念的にヨーロッパを捕らえ、憧れているに過ぎない。彼女のこの態度は『国際挿話』(‘An International Episode’) の主人公ベッシー・オールデンとよく似ている。盲目的にヨーロッパに憧れるアメリカ人は当時、かなり多かったものと考えられる。そしてアメリカの経済が向上し、また、旅客の輸送手段が発達するにつれ、より多くのアメリカ人達がヨーロッパへと出掛けるようになっていった。女性だけでの旅行も段々と増加していったのはジェイムズの作品でも見ることができる。<sup>3)</sup>

キャロラインのヨーロッパへの憧れについて『私』は次のように述べて

いる。

“You’ve the great American disease, and you’ve got it ‘bad’—the appetite, morbid and monstrous, for colour and form, for the picturesque and the romantic at any price. I don’t know whether we come into the world with it—with the germs implanted and antecedent to experience; rather perhaps we catch it early, almost before developed consciousness—we feel, as we look about that we’re going to be thrown back on it hard.”<sup>4)</sup>

この『アメリカ病』とは何であろうか。『私』の言葉を借りると『どんな犠牲を払っても色彩や形式の整ったものや、絵画的なものやロマンティックなものを見たいという病的で恐ろしい欲望』ということになる。これはキャロラインだけがかかっていた病ではなく、当時の多くのアメリカ人がかかっていたと思われるものである。独立後、ほぼ1世紀経っていたものの、文化的には植民地劣等感に付きまといわれていたと考えるのは自然である。『国際挿話』のベッシー・オールデンを初めとしたジェイムズの作品の主人公たちはもちろん、ジェイムズ自身もアメリカよりもヨーロッパに強く魅かれていた。このことは作家ホーソーンについての評論の中に読み取ることができる。ジェイムズはヨーロッパにはあってアメリカにはないものを羅列しているが、その一部にこの『アメリカ病』にかかっているものが切望するようなものが挙げられている。『宮殿もない、城郭もない、荘園もない、大地主の古めかしい邸宅もない、牧師館もない、茅葺きの田舎家もない、藁の這った廃墟もない。』<sup>5)</sup> 要約すれば、『絵画的 (picturesque) なもの』が切望されていたのである。

第1章でもう一つ注目すべきなのは、キャロラインの経済状況である。19世紀のアメリカの女性には、職業選択の道はあまり開かれていなかった。一般に女性は家事や育児に専念するものと考えられていたので、社会的にも需要は少なかった。なかでも中流以上の比較的裕福な家庭では、妻や娘

が働くことは、その家の主人が家族を養うに足るだけの収入を得ていないことを意味し、恥すべきこととされた。女性に許されていたのは、つまり従事しても恥ずかしくない、尊敬される (respectable) 職業とは教師や家庭教師、家庭内でできる作家などの限られたものであった。ただし、下層階級においては、女性も一家の働き手としてそれなりの地位を占めていた。

キャロラインについては、彼女の家庭環境などに関しては一切言及されていない。家族関係も、生い立ちも、現在の暮らしぶりについても全く触れられていない。これはジェームズの作品において、主人公たちについてあまり詳しくは述べられていないという特徴の一例である。彼女は自活しているらしいことや、第3章において引き取った従兄の妻と暮らしていることから、誰か保護者的な人間は周囲にはいず、自立した女性のように描かれている。しかし、精神的には未熟で、それは彼女の外見が『少女のような体つきで、子供っぽい色つやをしている』<sup>6)</sup> という点に現れている。経済的な自立とヨーロッパに対する子供っぽいまでの熱烈な憧れのアンバランスは彼女の弱点となりうるのである。

第2章はそれから3年と数カ月たったフランスの港町、ル・アールにおいての事である。『私』は妹を迎えに出掛けて行ったところ、偶然妹夫婦と同じ船で旅をして来たキャロラインと再会するのである。

キャロラインは船旅の間中ずっと『船酔いするでもなく、ああいうふう  
に両手を組んで、東のほうの水平線を眺めながら、舷側にしょっちゅう腰  
掛けていた』<sup>7)</sup> と言われる。これは彼女が夢を実現したヨーロッパへの旅  
を、その過程においても楽しませずにはいられない、そしてフランスへ到着  
するのが待ち来れないというはやる気持ちを押さえかねていることがよく  
表されている。

先に気付いた『私』が話し掛けると、キャロラインはそれは幸せそうに返答する。

Very happy indeed she looked. There was no sign of her being older; she was as gravely, decently, demurely pretty as before. If

---

she had struck me then as a thin-stemmed, mild hued flower of Puritanism it may be imagined whether in her present situation this clear bloom was less appealing.<sup>8)</sup>

彼女は憧れの地、ヨーロッパに到着して、晴れ晴れとして以前より魅力がなくなったところか、より輝いて見えたに違いない。そしてこの港町に座っているだけでも夢の中にいるようで、『何もかもがすてきでロマンティック。コーヒーに酔ってしまったのじゃないかしら。私の死んだ過去のコーヒーとはまるで違いますもの。』<sup>9)</sup>と『私』に告げる。『死んだ過去』とは何を指しているのだろうか。当然アメリカでの事を意味しているのだろうか、『死んだ』というのはあまりにも極論過ぎないだろうか。確かにヨーロッパに比べれば、先に述べたようにアメリカには人の心を感動させるものは少ないだろう。しかし彼女のようなヨーロッパ崇拜は少し過剰とも言える。このヨーロッパ崇拜、ロマンティックなものに過度に憧れる気持ちが結局は彼女の命取りとなるのである。

彼女は従兄を信用して旅行のための巡回手形を彼に預け、のんびりと腰を落着けている。『私』は彼女の全財産が彼女の従兄の手に渡ったことに対し、『身のすくむような思い』<sup>10)</sup>をする。全く知りもしない男に対して『私』は危惧の念を抱くのだが、これは『私』の世慣れた経験から発するのであろうが、読者にとっても彼女の無警戒ぶりにはさすがに不安感が募らせられる。相手が身内のためもあるだろうが、彼女自身は何の疑惑も持たず、ただただ幸福感に浸っている。

She was lost in the vision and the imagination of everything near us and about us—she observed, she recognized and admired, with a touching intensity.... We talked of these things, and there was something charming in her freshness of perception and the way her book-nourished fancy sailed forth for the revel.<sup>11)</sup>

彼女の従兄がようやく登場するが、一目見ただけでうさんくさい人物だということはわかる。先入観のためもあるだろうが、わざとらしさと奇妙な落ち着かなさが強調されている。キャロライン本人の相手への全面的信頼とは異なり、わざわざアメリカから旅して来た従妹を歓迎し、いたわるようなそぶりは感じられない。

第3章で事件が発生する。『私』がキャロラインが滞在しているホテルへ訪ねてみると彼女は泣いている。従兄の話に同情したあげく、全財産を彼に渡してしまったのだった。『私』は彼女の保護者のような気持ちになり、事の真相をつかもうとする。確かに『私』の言うとおりに、彼女には保護者が必要であった。ロマンティックなものに憧れるあまり、従兄の作り話にすっかり騙されてしまった。騙した当人はワインを十分に飲み、デザートの果物までたいらげていた。困窮の極みにあり、従妹の貴重な財産を取り上げてしまうような状況にいる人間がすることとは全く考えられない。おそらく彼女のヨーロッパ来訪を告げる手紙で彼女のロマンティックなものに極端に弱い性格を見抜いていたに違いない。彼が彼女のやって来るのを待ち構えていたことは十分に推測できる。ただ、キャロラインはそのロマンティックな世界に自分からすすんで騙されていたようにも考えられる。会ったこともない従兄の妻からの実際にはお金の無心の手紙を自分への『信頼と同情』を求めたものだと考え、『旧世界らしいすばらしいロマンス』だと『伯爵夫人』からの手紙に感動している。『気の毒なこの女性はこの華やかな家系にお金を騙し取られることを多分興味深いこととっていて自分の蓄えを失うことが自分にとってどういう意味を持つのかは分からなくなっているようだ。』<sup>12)</sup>と『私』は冷静に観察しているが、もうどうしようもない。『私』には口をはさむ権利はないのだ。ただ彼女は完全に絶望している訳ではない。『目には諦めと恍惚ともいえるものがある—すべてを捧げ尽くしたという表情に高揚した苦悩の色が混っていた。』<sup>13)</sup>このことが現実においてどういう意味を持つのか、それには目を向けず、想像上の美しい世界に酔い、自分も『ロマンス』に貢献できたという自己満足に浸っているとも言える。故郷アメリカでは慎ましく教師生活を送り、ただただヨーロッ

パに憧れるキャロラインにとって、この自己犠牲は尊いものであり、自分も『ロマンス』の世界の一員になれたという喜びを与えてくれるものだったに違いない。彼女は次のような事を言っヨーロッパを去っている。『私はきっとこの懐かしい旧世界のヨーロッパをいつかは見る事ができると思います。』<sup>14)</sup> 結局彼女は憧れの地にわずか13時間しか滞在しなかったのである。

『私』はそれから5年後、再びアメリカの友人宅を訪れ、キャロラインに再会することになる。しかし今回の出会いは彼女にとってかえって苦痛をもたらすものとなったのである。彼女のもとにはあの従兄の未亡人が滞在していたのである。

彼女の住まいについては次のように描写されている。『安く手に入れたものを引き立たせて見せようとする、趣味のある引退した老嬢の住まいには自然でふさわしいもの』<sup>15)</sup> とある。年齢的にはおそらく40才を少し過ぎたところだろうが、引退とはまだ少し早すぎるように思われる。

彼女はこれまでの出会いではいつも若々しく、希望に輝いていたように形容されているが、ヨーロッパでの出会いからわずか5年で彼女の容貌はすっかり変化してしまっている。

...her innocent eyes rounding themselves as of old. She was much older; she looked tired and wasted.<sup>16)</sup>

She looked ten years older, and I needn't now have felt called to insist on the facts of her person. But I still thought them interesting, and at any rate I was moved by them.<sup>17)</sup>

Her wan set little face, severely mild and with the question before now quite cold in it, spoke of extreme fatigue, but also of something else strange and conceived—whether a desperate patience still, or at last some other desperation, being more than I

can say.<sup>18)</sup>

彼女の精神性はさほど変化しているとは思われないが、そのにじみでるような疲弊は何を物語っているのだろうか。『伯爵夫人』と名乗る従兄の未亡人との生活は彼女に何をもたらしたのだろうか。

この自称『伯爵夫人』は『広く世間を知っていて、特にフランスの社会を知っている』『私』でなくても、『私』の友人の母親をたずねて来た、ノース・ヴェロナの牧師の夫人でさえ、この女性が『伯爵夫人』でないことは看破している。

“You’ll make out the sort (of the visitor!)” said the minister’s wife. “She’s easily seen; she generally sits in the front yard. Only take care what you say to her, and be very sure you’re polite.”

“Ah she’s so sensitive?”

The minister’s wife jumped up and dropped me a curtsey—a most sarcastic curtsey. “That’s what she is, if you please, ’Madame la Comtesse!”<sup>19)</sup>

おそらくこの自称『伯爵夫人』のことはこの近辺では話題にこと欠かなかったであろう。誰もがその正体のうさん臭さを感じているのにキャロラインだけは目を閉じ、耳をふさいでいたのだろう。

she was coarse, common, affected, dishonest—no more a Countess than I was a Caliph. She had an assurance based clearly on experience; but this couldn’t have been the experience of “race.”<sup>20)</sup>

I couldn’t give my friend a hint of how I myself personally “saw” her interesting pensioner—whether as the runaway wife of a too-jealous hair-dresser or of a too-morose pastry-cook, say; whether

---

as a very small bourgeoisie, in fine, who had vitiated her case beyond patching up, or even as some character, of the nomadic sort, less edifying still.<sup>21)</sup>

この自称『伯爵夫人』はもったいぶった紳士にやさしいフランス語を教えていることになっているのだが、実際にはそれほど大した授業をしているわけではなく、この弟子には全く進歩が見られない。実際にはまともな授業をしているどころか、『伯爵夫人』にとっては、経済的な意味もいくぶんかはあるだろうが、単なる手慰みのなものであり、紳士にとっては体面的なものであり、また自称『伯爵夫人』との一種のアヴァンチュール的なものに過ぎない。そして『伯爵夫人』はキャロラインを何の遠慮もなく召使のように酷使しながら、不平を言いつつ、適当に楽しんで暮らしているのである。彼女が半ば嬉しそうに言っているように彼女の弟子の紳士の求婚に対し、彼女がそれを受けてキャロラインのもとから去って行ってくれば、キャロライン本人はもちろん、『私』だってどんなに安心できるだろう。しかし自称『伯爵夫人』はおそらくおいそれとは応じず、駆け引きを楽しみ、キャロラインの苦しみを長引かせているだけだということは容易に推測できる。『伯爵夫人』はアメリカに来てからのこの2年間を『一刻一刻の試練』と愚痴をこぼしているが、キャロラインにとってのこの2年間は絶望的であり、一刻一刻が拷問のようなものであったに違いない。キャロラインが従兄の未亡人がやって来たのが2年と4カ月前だと正確に答えたのはその一瞬一瞬の絶望をひしひしとかみしめていたからに違いない。

この『伯爵夫人』は自分の正体はキャロラインにはたくみに偽り続けているつもりだが、その卑しい、もったいぶった態度には如実に現れている。そしてパリを知っている『私』が登場すると、パリに恋い焦がれている、異邦人といった調子でフランス語を交えて会話を進めて行くが、つきつけて来た嘘のほころびを露呈してしまう。『爪の先まで、パリジェンヌです。』<sup>22)</sup> 本人は自分のことを趣味もよく、あかぬけて上品なフランス女性であるように振る舞っているが、かつてキャロラインについて、そして今

もつき続けている嘘とは矛盾していることに気付かないのである。キャロラインはプロヴァンスで一番の旧家の出身の元『伯爵夫人』という彼女の素性にロマンスを感じてすっかり騙されたのだったが、かんじんの本人がパリに関する会話に夢中になって、そのことを失念してしまっている。何というお粗末な演技力であろう。キャロライン自身も現在では従兄の未亡人の素性に疑わしいものを感じ取っている。事実、『私』が『伯爵夫人』のことをどう思っているのか、切実なまでに知りたがっているようなまなざしを向けるが、言葉には出さない。知りたくはあるが、口にして、はっきりと否定的な答えが返って来るのを恐れたためであろう。しかし、そのために彼女はこの絶望的な状況から抜け出す機会を失うことにもなるのである。あるいは『私』からの返答を聞いたとしても彼女はそれを『伯爵夫人』に突き付け、辞去を促すことができるだろうか。このフランス人女性はどんなことを眼前に突き付けられようとも、彼女独特の『自信』でそれを蹴散らしてしまうだろう。彼女にとってキャロラインを騙すことなど、非常にたやすいことなのだろう。

しかし、ここでもう一つの問題点が残る。最終的に『私』は自分自身の事態だけを收拾しようとする。

I couldn't let in, by the jog of a shutter, as it were, a hard informing ray and then, washing my hands of the business, turn my back for ever. I could on the contrary but save the situation, my own at least, for the moment, by pulling myself together with a master hand and appearing to ignore everything but that the dreadful person between us was a "grande dame." This effort was possible indeed but as a retreat in good order and with all the forms of courtesy.<sup>23)</sup>

『私』のこの態度は非常に消極的で、責任回避的である。かつてキャロラインに『誓って僕はあなたの保護者なのです。あなたには保護者がいるよう

に思えます。』<sup>24)</sup>と述べていたにもかかわらず、今回は手を引こうとしている。もし、本当に彼女の為を思うなら、『現実の厳しい知識の光を入れておいてから』<sup>25)</sup>、つまりこの偽の『伯爵夫人』の正体を暴露し、キャロラインのもとから立ち去らせ、彼女を強欲な女の手から解放してやるべきではなかっただろうか。以前に彼女を守ろうとしたのは彼女の財産があつた卑劣な従兄の手に渡ろうとしたときだった。しかし今回はそのときよりも事態ははるかに切迫している。一時的に財産を奪われるよりも、実際には血縁関係もない、偽の『伯爵夫人』に一生涯搾取されることのほうが事態はずっと深刻である。結局『私』は真実を明らかにしないことで『自分自身の事態だけを收拾』したのだった。キャロラインを見捨てたのも同然のことをしたのだった。『私』はその時々、キャロラインの境遇に関心を持ちながらも、彼女の実人生には全くかかわらずに終わるのである。これは前述のウィンターボーンなどジェイムズの作品中の男性によく見られる傾向である。主人公に強い関心を持ちながらも、あくまで傍観者の立場を崩そうとはしない。こういった態度はジェイムズの実人生にもあてはまることである。彼は常に部外者の目で観察を続け、作品に反映させていったのである。

『私』が辞去するにあたり、差し出した手を握ったキャロラインの顔に浮かんだ表情は『私』には判断できないものだった。『必死の忍耐』なのか、それとも『なにか別の絶望』なのか。『なにか別の絶望』とは一体何なのだろうか。おそらくキャロライン自身も一緒に暮らしていくうちにこの従兄の未亡人の正体が『伯爵夫人』ではないことは気付いたことだろう。しかし従兄は既に死んでいるわけだし、確かめるための根拠は存在しない。たとえ、問い詰めたところでこの『伯爵夫人』は『経験に基づいた自信』でキャロラインの疑惑など一蹴してしまうことだろう。さらに、もしすべてが虚偽であれば、かつてヨーロッパ旅行を諦めたときの彼女の犠牲が全くの無駄になってしまう。そういったことが彼女の脳裏にあってしゅん巡っていたのだろう。

キャロラインは結局その後8～9年後亡くなったということが『私』の耳に届く。年齢は47才前だったと推測される。4度目の出会い以降につい

ては何も触れられていない。だが、キャロラインのその後の人生がただひたすら忍耐の歲月だったことは想像に難くない。彼女はかつてレ・アープルの港町でフランスを去るにあたって『懐かしい、古きヨーロッパをまだ見られると思います。』と確信して言ったのだが、それは間違いではなかったと『私』が最後に述懐しているのは、結局彼女にとってのヨーロッパはあの偽の『伯爵夫人』で、キャロラインはその後の人生をヨーロッパという幻想に振り回されてしまったのだった。

### III

『四度の出会い』の筋をたどってみると、語り手と主人公のニュー・イングランドの女教師との出会いのたびに、相手の境遇が変化して行くのを描写するというスケッチ風の手法を採用している。これはツルゲーネフの『三度の出会い』と共通している。

ツルゲーネフの作品では一人称の語り手によってある女性の恋愛事情が語られているのだが、その三度の出会い毎にその女性の環境は大きく変化して行き、最終的には恋愛の相手とは別れ、しかもその相手が別の女性とパーティーに現れたところに遭遇し、衝撃を受ける。そして語り手の前からは姿を消してしまう、という筋立てになっている。この語り手はこの夫人に対し、軽い恋愛感情を抱いているように思われるが、あくまでも観察者の立場に立って、積極的なかわりを持つとはしない。この傍観者的なスタンスもジェイムズの作品中の人物と共通点が見られる。<sup>26)</sup>

ジェイムズはパリ滞在中にツルゲーネフとは親交があり、その影響を受けたことも考えられるが、やはりこの作品においては『国際テーマ』への傾倒が見られると考える方が自然である。ツルゲーネフの作品では恋とその女性の素性或相手の男性のことなどといった謎が主題となっているが、ジェイムズのこの作品では『国際テーマ』と同様に主人公の人生のペーソスにも重点が置かれている。

この作品は1877年11月に『スクリブナーズ・マンスリー』(Scribner's

Monthly)に掲載されたものだが、『国際テーマ』としてはそれ以前に既に『アメリカ人 (*The American*)』を創作し、出版もされている。ジェイムズの初期の代表作の一つとされる『デイジー・ミラー』はその翌年に書かれたものである。本来彼の『国際テーマ』は『新世界』対『旧世界』のかかわりを様々な観点から描き出したものであると定義される。その点からはこの作品は厳密には『国際テーマ』を主眼としたものとは言えない。しかしジェイムズの作品の中で重要な役割を果たす『アメリカン・ガール』が描かれていることは軽視できない。

この作品が書かれる3年前、『マダム・ド・モーヴ』(‘*Madame de Mauve*’)という作品を創作しているが、この主人公もまたもう一人の『アメリカン・ガール』である。ジェイムズの『アメリカン・ガール』はそれぞれの作品で姿を変え、成長し、最終的には『黄金の盃』(*The Golden Bowl*)のマギー・ヴァーヴァーで完成を見る。ただそれぞれの『アメリカン・ガール』はもちろん重なり合う部分はあるにせよ、各人異なった無垢 (innocence) を象徴している。例えば、『マダム・ド・モーヴ』では主人公のユーフィーミアはピューリタンの厳格で冷徹な無垢を象徴し、その厳格さの結果、夫を死に至らしめる結果となっている。『四度の出会い』のキロライン・スペンサーの場合、傷つくこと (vulnerability) を恐れ、相手を疑わず、一歩踏み出す勇気を持ってない、良心的、自己犠牲的、そして夢見がちな無垢を象徴していると言えるのではないだろうか。

キャロラインにとって『ヨーロッパ』とは結局憧れの象徴に過ぎず、全く現実を見ないまま、実際には何の交渉も無く終わってしまうものだった。結局、彼女の人生とは不毛で、挫折の連続であったと言えよう。彼女がヨーロッパに夢中になるあまり、友人に『あなたのことどうなるかわかりません、出帆しなければ気が狂ってしまうでしょうし、出帆しなくても気が狂ってしまうでしょう。』<sup>27)</sup>とされたことがあるが、凶らずも彼女の将来の危機を暗示していたとも言える。では何故このような事態になってしまったのだろうか。

キャロラインにとって『ヨーロッパ』は確かに文化の花開く憧れの地で

はあったが、同時に彼女を現在とは異なった次元へと連れ去るであろう、脅威を象徴する場でもあった。先の友人の言葉からも、『ヨーロッパ』に対するキャロラインの熱中ぶりは余りにも極端である。彼女は『ヨーロッパ』を現実の日々の生活からの逃避の場に使っていたとも言える。キャロラインは慎ましい教師生活を送っており、それほど友人もなく、ひっそりと自分の趣味に生きていると説明されているが、そんな彼女の情熱のはげ口が『ヨーロッパ』なのである。最終的には結婚もせず、教師生活を引退した彼女にとって従兄と『ヨーロッパ』を象徴する『伯爵夫人』とのロマンスは自分の果たせなかった情熱を表象するものだと解釈できる。このような『ヨーロッパ』に対する二律背反的な (ambivalent) な気持ちは彼女の処女性 (virginity) とも関連していると考えられる。

ジェイムズの作品においてはあまり『性』を強く全面に押し出したものは少ないと言うことができる。このことはジェイムズの若いころに負った背中の傷 (an obscure hurt) のために彼が生涯独身で通したという事に関連しているという説があるが、ここではその点に関しては言及しない。ただジェイムズの女主人公たちの向こう見ずな (reckless) ところと物事への神経質なまでのこだわりかた、そして現実に対する臆病さ、不安感、これは彼女たちの自分を凌駕してしまうかもしれない男性的なものへの恐れが根底に存在していると考えられよう。そういった不安感につけこまれ、男性との間に、お互いを理解し合い、個人対個人という独立した、対等な関係を成立させることができないうまま、『運命の犠牲者 (the sport of fate)』となってしまう危険性が多分に見受けられる。

この『四度の出会い』においては、もうひとつ注目すべきなのは主人公キャロラインと作者であるジェイムズ自身との共通項である。ジェイムズは1875年10月にヨーロッパ永住の決意を固めてパリへと出発した。そこでツルゲーネフと親交を結び、フロベールやゾラなどと交際を始めた。小説技法の点では教えられることも多かったが、フランス文壇の閉鎖性や、作家の奔放な私生活などにはなじめなく、反発のようなものを感じ、翌年の12月にはロンドンへ居を移している。結局ジェイムズはロンドンに長く暮

らし、後にサセックス州ライにラムハウスというカントリーハウスを購入し、そこに永住することとなる。そして死の前年、イギリスに帰化したのである。しかし本当に『ヨーロッパ』になじめるものなのか、最悪の場合、『ヨーロッパ』から永遠に切り離されてしまうのではないかというジェームズの悪夢が反映しているとも考えられる。ジェームズ自身も重度の『アメリカ病』にかかっていたのである。

『国際テーマ』という観点に立つとこの作品の完成度はまだまだ低いと言える。しかし、『アメリカ病』という考え方は後の作品にも見て取ることが可能だし、この後大いに発展し、ジェームズの大きな理念の一つになっていく『アメリカ娘』という考え方が導入されていることも考え合わせると、この『四度の出会い』は『国際テーマ』を扱った初期の作品として軽視できないものである。

#### 《註》

- 1) F.O. Matthiessen, Kenneth B. Murdock (ed); *The Notebooks of Henry James* (New York: Oxford University Press, 1947) p.47.
- 2) Henry James, 'Four Meetings', *The Short Stories of Henry James* (New York: The Modern Library, 1945) p.4.
- 3) これは『ある婦人の肖像』のイザベル、タチェット夫人、ヘンリエッタ、及び『鳩の翼』のミリー、ストリンガム夫人にもあてはまることである。
- 4) *ibid.*, p.8.
- 5) Henry James, 'Hawthorne', in *English Men of Letters* (New York: Harper & Brothers, 1879) pp.42
- 6) James, 'Four Meetings', p.4.
- 7) *ibid.*, p.11.
- 8) *ibid.*, p.11~12.
- 9) *ibid.*, p.12.
- 10) *ibid.*, p.13.
- 11) *ibid.*, p.14.
- 12) *ibid.*, p.22.
- 13) *ibid.*, p.22.
- 14) *ibid.*, p.23.
- 15) *ibid.*, p.25.
- 16) *ibid.*, p.26.
- 17) *ibid.*, p.27.

- 18) *ibid.*, p.37.
- 19) *ibid.*, p.25. ( ) は筆者
- 20) *ibid.*, p.33.
- 21) *ibid.*, p.36.
- 22) *ibid.*, p.34.
- 23) *ibid.*, p.36.
- 24) *ibid.*, p.19.
- 25) *ibid.*, p.36.
- 26) このような傍観者的立場は『四度の出会い』の語り手『私』だけではなく、『デイジー・ミラー』のウィンターボーン、『ある婦人の肖像』のラルフ・タレットもその一例だし、作者ジェイムズ自身の実生活においても同様である。
- 27) James, 'Four Meetings', p.8.